

ピエール・ブルデューと アングロ・アメリカ哲学



リチャード・シュスターマン
Richard Shusterman

1996年12月19日
於：文化科学高等研究院

思想家の見方というのは、思想家がその中で考える社会的な場で基本的には構成されます。これは抽象的、先験主義的、あるいは普遍的だと考えられている哲学のような分野においてもそうです。偶像破壊主義者はこの場に反対するのですが、論理的にはその場に依存しているのです。また同様に、是認しているということとを認識していない伝統主義者もその場に依存しているのです。

この点をピエール・ブルデューほど強く主張している人はいません。ブルデューは知的な場の社会的な性

格、知的産物の純然たる意味は、具体的な社会的な詳細という観点、すなわちどういうものが問題になっているのか、それから位置、関心事項、権力、力、そういったものを考えたうえでとらえなければいけない、すなわち社会的なものという抽象的な考え方、曖昧なかたちのままでとらえるべきではないと見えています。社会的なものがあるという考え方のほうは、伝統あるいは実践をたてる哲学の理想主義的な考え方に通常見られるものです。

こういったことを考えると、アングロ・アメリカ哲

学とブルデューの関係を適切に説明するには、さまざまな相互に作用しあう、重複しあう、あるいは対抗しあう、または対抗されるような場を含む非常に複雑な社会分析が必要であることがわかります。

単にフランスの哲学、社会思想のみならず、アングロ・アメリカの哲学あるいはフランス以外の大衆の理論が必要になりますが、ここではそういった分析は行いません。ただそうは言っても、そういったことをやるにはここに与えられているスペースだけでは不十分であるとか、あるいはまた私に課せられた哲学者としての役割からはずれるというような通常のいいわけをするつもりもありません。

この論文（本誌一二七頁）はもともとピエール・ブルデューを特集した『クリティーク』の特別号に載ったものであり、三人の哲学者、私、チャールズ・テーラー、それからジャック・ブーブレスが寄稿を依頼されました。テーラーとブーブレスはピエール・ブルデューのハビトゥス、それからヴィトゲンシュタインの規則について書いて、私はもつと広く、ピエール・ブルデューとアングロ・アメリカ哲学の観点から書きました。

社会分析ということではなくて、私はデューイあるいはヴィトゲンシュタインが行ったようなプラグマチックなポイントにアピールをしたい。すなわち適合性の概念、例えば正確さとか、あるいは精密さといったものは絶対的な標準を持っているということではなく、考へてする目的に依存するものであるということを考へたいと思います。

オースチン、ヴィトゲンシュタインに対する親和性

それでは私が『クリティーク』誌に載せた論文の主目的は何かというと、そもそもきわめて大きな影響を与えた偉大な思想家、それから私はこの人のおかげでパリに初めて行けたわけでもありますから、こういう人に対して敬意を表するという儀式としての目的があります。この儀式をうまく行うためには、逆説的になつてしましますが、敬意を表すること以上のことを行なわなければいけない。そういうことで、敬意を表することを超えて、ここでは私はアングロ・アメリカ哲学をブルデューが利用するいくつかの特徴について明確にしてみたいと思つたのです。

この点は、少し考えられるとおかしい、よくわからない

と思われるでしょう。つまりブルデューは、彼の仕事に対してアングロ・アメリカ哲学がきわめて中心的であるということを強く主張しているからです。

ピエール・ブルデューがアングロ・アメリカ哲学を気に入ったほどには、アングロ・アメリカ哲学者のほうではピエール・ブルデューを気に入っていないのですが、私としては、アングロ・アメリカ哲学がブルデューのアプローチと単に調和しているのみならず、その中心的な目標のいくつかに向かって論理的、あるいは必要な次のステップであると認識すべきことを示したいと思います。

そして次にアングロ・アメリカ哲学の二つの主要な傾向である分析哲学と、それからプラグマチズムについて示し、それから最後にアングロ・アメリカ哲学を展開するという戦略を考えることによって、現在でも残っているブルデューの哲学的立場と、私が欲するプラグマチック哲学との違いについても光をあてていきたいと思ひます。

ブルデューは分析哲学、特にJ・L・オースチン、それからヴィトゲンシュタインに対する親和性を強調しています。ブルデューはもつとも重要で顕著な場所

で、非常に強い賞賛を込めて、オースチンあるいはヴィトゲンシュタインを引用しています。

オースチンについてはもつとも強く賞賛すると言っているわけですが、ブルデューはFieldwork in Philosophy, 'Le point de Vue Scholastique' というタイトルで発表しています。それからやはり同様のかたちで、ヴィトゲンシュタインは自分にとってきわめて役に立つ、そしてまた難しいものであると言っています。こういう告白は、疑いなく真摯なものです。しかし二つの理由で当初は不思議に思われます。まず第一に、もしその理論家の思考がその理論家のいる知的な場所によって基本的には形成されるとすると、おそらくはオースチンあるいはヴィトゲンシュタインは、ブルデューの知的な作業のフランスの場により中心的地であったほかの哲学者、つまりハイデッガー、サルトル、フッサール、メルロー・ポンティ、その他の哲学者に比べて、おそらく影響力は少ないはずでしょう。

それから第二点として、オースチンあるいはヴィトゲンシュタインは、実際のところ、ほかのその他の理論家の作品に比べて、ブルデューの作品の中では、あまり議論されていません。またこのよくわからない、

困惑というのは、ブルデューの最近の哲学書、*Raisons*

Pratiques の裏表紙を見ても、やはり非常に不思議だと思ひます。その裏表紙には、単に分析哲学者のみ具体的に記述するにふさわしい、*"il m'ette..."* と書かれて

いるのです。こうした哲学者は、この本の哲学的な中心部分をなすとはほとんど思われません。例えばストローソンについては、作品どころか、その本の中にはまったく現れていないのです。

ただこの困惑は、対立する実証的な利用性、ポジティブなユースフルネスを区別するということ、それからまた、もしその人の作品が具体的なオリジナリティによって知的に立派なものになるということであれば、その分野の中のほかの作品と対照させるということが認識されることで少しは気が楽になります。そうすると自分が受け入れるというよりも、自分が反対する著者あるいは見方をより議論してみようということになり、こういったことを考えると、そんなに不思議でもないという気がします。

さらに区別するという目的を考えれば、区別するというのは所与の社会の場という観点からですが、自分のいる場にはない、したがってより近くて、より危険

なライバルである著者よりも、自分のいる場の外に

いるような著者に実証的に焦点をあてる。例えば読えるとか、恩を感じていることを告白するというような私たちで焦点をあてたほうがより利益があるように思ひます。

プラグマチックな哲学的戦略

フランスの哲学の分野の非常に支配的な中心部分の外に、しかしながらアングロ・アメリカの分野の支配的な中心部分にある分析的な哲学は、ブルデューがフランスの支配的な構造に挑戦し、そして自らの作業により大きな力を得るのに役立つようなアイデアとして、非常にすばらしいと睨んだのです。

ブルデューもよく知っているように、外国のアイデアを使う大きな動機の一つは、自分の国における支配的な権威を揺るがすことです。フランスの哲学の分野、場ということについて言えば、ブルデューの職業的な投影として、職業的な道を歩んでしまい、結局、自らは端つこのほうに追いやらざるをえない。ですから哲学を乗り越え、社会学者という職業をとることによって、ブルデューは専門家あるいは本当の哲学者とし

ての制度上の特性、アイデンティフィケーション、あるいはオーストリゼーションを自ら奪ったのです。

最近はかなり疑念が出てきていると思いますが、哲学が非常に大きな意味でのフランスの知的な場で支配的であるかぎりにおいては、こういったやり方をすれば、ブルデューの力、権威は、より一般的に制限を与える影響を及ぼしたと思います。

彼の哲学的な理論が脇のほうに追いやられてしまわないために、もっともよい方法というのは、それがフランスの哲学の分野において行われてしまうのですが、そのフランスの哲学の裏をかくということがやはりもっともよい方法になります。その裏をかくやり方というのは、分析哲学というライバルの哲学分野の象徴的な力を借りることです。

この戦略をさらに魅力的にするのは、分析哲学の科学的でプラグマチックな名声でした。これは単にブルデューのプラグマチックなアプローチを是認するわけで、そしてまたブルデューのプラグマチックなアプローチを、厳格な哲学の伝統に同化させます。それはバシュラル、カギレームを引用することで同化できるわけですが、さらに、これによってブルデューは制度

的に支配的なフランスの哲学を非科学的な戯言、あるいは制度、伝統によってのみ認められているようなばかげたこととくさすことができたのです。

こういう厳格で、プラグマチックで、科学的な哲学の戦略をとることによって、分析哲学をブルデューが使える、力強く、また象徴的な武器にするのであれば、どうしてオースチンあるいはヴィトゲンシュタインに焦点をあてるのでしょうか。オースチン、ヴィトゲンシュタインは結局は科学的なデイスクールというよりも、通常の言語の擁護者であり、彼らは非常に曖昧だということ、分析主義のより科学主義的な人々からはよく批判されます。どうしてブルデューはラッセル、カルナップ、アイヤー、クイン、グッドマンといった人たちを用いないのでしょうか。こういった人たちのほうが科学的プラグマチズムのより中核的な例となるはずなのですが。

ブルデューが選択したものは、単に賢明な象徴的な戦略というだけではありません。オースチン、ヴィトゲンシュタインに本当に親近感をおぼえているのです。単に哲学における科学的プラグマチズムの模範というだけではなく、社会哲学者、プラグマチズムの理論

家といった人たちは、社会的な文脈あるいは歴史の不可欠な構成的な役割を主張することで、分析哲学においては模範的です。主張している点は、言語が媒介となっている思考すべては基本的には社会的であるということです。

その意味と価値は、社会の外の世界における自律的な指示対象あるいは事実からではなく、その経験世界を構成するのに役立つ複雑で、文脈依存的な社会慣習あるいは習慣、その経験世界を構成するのに役立ち、また社会あるいは歴史的な文脈とは異なるという、複雑で、文脈依存的な社会慣習、習慣から発生します。

習慣による言語の発話

ラッセルやムーアの場合、個々のプロポジションに焦点をあてたわけですが、ラッセルやムーアの分析的なアプローチとは反対に、オースチン、ヴィトゲンシュタインが主張したのは、言語の発話の意味は言われた言葉に依存するよりも、言われた具体的な文脈に依存する。そしてその文脈は社会的な状況によって明らかに構成され、その社会的な状況ゆえに可能になった文脈に依存するというものですが、この社会的な状況

は、言語を話すという社会的に学習された習慣ではありません。

オースチンが主張するのは、言語の発話は指示あるいは意図の単なる産物ではなく、基本的には習慣によって構成されている。つまり社会的な文脈とは異なる適切なパフォーマンスについての社会的な規範によって基本的には構成される。われわれが勉強するものはセンテンスではなく、発話を出すということであるということです。

彼のもととのドクトリンは、特定の発話、例えば約束であるとか、結婚の約束であるとか、あるいは命名であるとか、そういったものは、言語的発言というよりも、社会的な行為と考えるほうがより適切である。何かを言うというよりも、何かをすると考えるほうがより適切であることを示すものでした。

そういう象徴的な表現のようなきわめて儀式化された行為において重要なのは、単に単語というよりも、その背景となっている制度か、習慣、社会的な役割、あるいはその言葉の言語的な意味が本当に無視できるような役割しか果たせないような所与の文脈のほうがより大切である。例えば言葉がまったくなくても、つ

まりゼスチャーのみでもうまく行われる行為を想像することができるとしよう。

オースチンの後年の一般的な発話行為、スピーチアクトの理論が、推敲文あるいはコンスタティブ・ディステインクションに挑戦するのであれば、すべての発話は、社会的な行動の一形態である。すなわちすべての発話内行為、"illocutionary acts"は習慣によって形成されるからだという事実を指し示すために、そういう挑戦をしたのです。

後年、ヴィトゲンシュタインはやはり同じように言語を社会的な習慣が基盤であると言っています。すなわち意見における合意ではなくて、言葉は人生の形態が基盤になるもので、こういった人生の形態は受け入れなければいけないもの、所与である。したがって、習慣、慣習が哲学的な基盤をなすというわけです。

ヴィトゲンシュタインもオースチンと同様に、言語的な意味は社会的な文脈に属する事柄であると言っているのみならず、社会的な文脈を変えるような考え方に對して、重要な歴史的な次元を加えています。そしてこの考え方をブルデューは彼にとつてきわめて重要であった美学の分野に適用しています。

つては、これよりも良い哲学的な認識、承認はないでしょうし、ブルデューのもう一つのプロジェクトである純粋な美学の歴史的な生成、それから文学の場を明らかにすることにおいても、これほどうまく認めうるものはないのです。

分析哲学の実現

ブルデューのその他のプロジェクトを見ると、ブルデューは単にオースチンやヴィトゲンシュタインを追っていたのではないのがわかります。実はオースチン、ヴィトゲンシュタインを超えたのです。

彼の分析的なプロジェクトは、その言語が使われる社会的な形態あるいは文脈という観点から言語を見ることで、言語の意味を明確にしようとするものだったのですが、オースチンあるいはヴィトゲンシュタインは、社会的な場を形成し、文脈を構成するような実際の社会的な力、位置、利害関係、役割、戦略についての体系的で複雑な分析は行っていません。オースチンの言葉を借りれば、トータルな発話状況におけるトータルな発話行為こそ、言語哲学が明らかにすべきものであるのですが、そのトータルな行為、トータルな状

美学的趣味の分析

ヴィトゲンシュタインにとつては美的判断の意味を理解するためには、「良い」とか「美しい」といった言葉、これはまったく特徴を持たない言葉ですが、こういったものに集中するのではなく、どういう場で言葉が発せられたか、その表現が行われたきわめて複雑な状況に集中することを必要としました。その表現そのものはそんなに重要ではない、これはヴィトゲンシュタインの引用です。

美的判断と述語は非常に複雑な役割をします。しかし非常に絶対的な役割であつて、これはわれわれがいうところのある時代の文化において、大きな役割を果たすのです。その利用を表現する、あるいは洗練された趣味という意味を表現するには、その文化を表現しなければならぬとヴィトゲンシュタインは言っています。さらにそうした表現は歴史的な変化についてもよく認識しなければならない。すなわち異なる時代においては、行われるゲームがまったく違つとも言っています。

文化的な場全体のフルスケールの総合的な研究を通して、正統な美学的な趣味を分析するブルデューにと

況は社会的な要因によつて構成されるものですから、こうした社会的な要因が嚴格で、明解で、妥当なかたちで体系的な方法で、明確にされるべきです。

ヴィトゲンシュタインとオースチンは、言語を支配する社会的な空間を認識するうえで一級の人たちでしたが、こういう社会的空間をどちらも理論化しませんでしたし、また一般的な概念的なスキーム、すなわち言語にその意味を与える社会的な状況を明確化するために、そのカテゴリーあるいは原則という妥当なかたちで秩序立った道具箱を作ろうとするために、要因のネットワークを明確に示そうとはしませんでした。

結局、彼らは特定の哲学を中心とする問題の個々の分析を行ったにすぎません。その卓見性、嚴格さにもかかわらず、作業はあまりに断片的であり、印象的であり、トータルなスピーチの状況によつて言語習慣の意味を分析する一般的なモデルとはなりえませんでした。

ブルデューはそういったモデルを提供します。より社会的なものに對して深く突っ込んでいきますが、分析主義者たちよりもよく分析哲学を実現するのです。分析主義者たちは、おそらく哲学の社会的な地位が社

会学の実現によって脅かされるのを恐れたのではないのでしょうか。もしそれがあまくないということであれば、オースチンが社会的なるものについてどれだけ突っ込んで考えようとしたかその限界を示すものではないでしょうか。

われわれは、彼がいう哲学者の学者的な見方に対して、「普通の人間」として、自分自身あるいは哲学のエリートグループを戦略的に見ようとするオックスフォードの教授、ヴィトゲンシュタインをどのようにとらえればいいのか。また通常の言語の厳しい分析という自分自身のやり方、学者的な正確あるいは社会的空間について、オースチンはどれほど考えたのだろうか。ブルデューはオースチンについて、できるだけのことをやったと言っているわけですが、オースチンのやったことは、目的は非常に限られたものではしたが、それをちゃんと達成したと単に褒めているだけなのでしょう。か。それともこれは哲学の限界であると、哲学の限界を認識して、あるいは哲学の限界を批判して、こういう言葉を吐いたのでしょうか。

ヴィトゲンシュタインによって、われわれは、社会的基盤を形成する言語、社会的あるいはその他の自然によってその理論的な重要性がより効果的に理解され、そして展開されるのです。

デューイのプラグマチズム

ブルデューがオースチンあるいはヴィトゲンシュタインの言語哲学が投影する問いかけの中心を進展させているという見方の例証として、私自身の言葉を付け加えることができます。これがゆえに、彼の作業が私の目の止まることとなり、そして非常に私を助けたものであると言えるのですが、私はオックスフォードにおいて、こうした分析哲学者の下で研究し、ヴィトゲンシュタインの専門家であるP・M・S・ハッカーと一緒に仕事をしましたし、オースチンの弟子であり、かつ遺稿の管理者であるJ・O・アームソンの下で論文を書きました。

そうした中で、哲学的な考え方として、一見したところ抽象的ではないかと思われるようなもの、例えば意味とか、真実とか、妥当性とか、そういったものがいかに深く社会的な組織、それから行為の実践的な関心事項を構成するかがわかってきたのですが、その一方で、社会的あるいは実践的な次元は、オースチンあ

基盤を形成する言語の認識は、哲学的な探求を文法的あるいは概念的なレベルに限定することによって、哲学が実践的な科学であると主張をさせない意思と合体する、あるいはそれと対置することを認識します。

ヴィトゲンシュタインは、われわれの関心事項はコンセプトの形成のこうした原因によりかかるとはならない。われわれは自然科学をやっているわけでもないし、博物史をやっているわけでもない。われわれはわれわれの目的のために、偽の博物史をでっち上げることもできると言っています。特定の哲学的な目的のためには、これで十分でしょうが、ヴィトゲンシュタイン自身が別のところで言っているように、これでは美学、倫理、その他の文化的な領域における判断の意味を説明するには十分ではありません。

より最近の分析哲学者、例えばジョン・サルなどは社会的な背景の基本的な重要性を依然として認識しています。これは単に言語行為だけでなく、意識そのものとしてでも認識しているのですが、こういった人たちはかかる研究をあまりにも安易にその背景に置きすぎます。それに対して、ブルデューは実際の体系的な分析を通して、これを前面に持ち出します。これに

あるいはヴィトゲンシュタインにおいても、十分に、かつ体系的に発展させられていないと感じていたのです。したがって、私は単にブルデューに目を向けたのみならず、ジョン・デューイのプラグマチズムにも目を向けました。ジョン・デューイの社会科学の哲学的な意味の理解、これはオースチンあるいはヴィトゲンシュタインの理解よりもさらに大きいわけですが、これによって思考が豊かになったのみならず、シカゴではG・H・ミード、それからそのほかの場所におけるプラグマチックな社会科学の実りある伝統の確立につながっていったのです。

もちろんデューイは次のように主張しています。すべての意味に従って、すべての思考は社会的であり、文脈的であり、最終的には習慣、実践に基礎をおく。したがって、われわれ体現されている生物が発展する。われわれはこれを発展させて、社会や自然の環境に対応する。そのやり方としては、環境に順応すること、それからまた環境を変えようかたちで環境に対応し、われわれ自身の目的に向けて進む。そして目的そのものも環境によって形成される。環境はそれ自身が歴史によって変化しつつあり、変化できる産物である。

デュューイはさらにこうしたプラグマチックなセンス、意味を構成する社会的な実践が、自立的で非言語的なレベルにおいて作用する習慣を通していかに維持されるかを説明し、またこういうものがいかに反省的であることなく、非機械的、知的、そしてさらには創造的でありうるか。それからまたこうしたものが、変わっていく状況を通じて、いかに変わっていくことができるかを説明しています。

デュューイのアプローチは社会的であるのみならず、発生論的です。彼の倫理の一番最初の部分はこういつたかたちで、われわれ自身の社会の形成に最終的にはつながっている初期の社会の慣習と構造の研究にあてられています。哲学の問題は第一義的には社会生活における問題の知的な反応であると主張しています。また哲学のもっとも基本的な概念あるいは区別のいくつかに、社会的な形成あるいは関心事項が由来していることを示しています。

また理論と実践、それから目的と方法の区別の性格は、ギリシャの社会生活におけるヒエラルキーがもとになっていて、エリート主義的な芸術の博物館的な考え方は、存在論的、概念的必要性を持たず、単に社会的要因によって形成されていると主張しており、ブルデューは、階級、階級の断片、経済文化資本をきわめて詳細に分析していますが、こういったブルデューの作業は、富と社会階級、そして経済資本と文化資本の間の関係は、デュューイが説明しているよりもっと複雑であることが明らかにしています。

さらにブルデューのニーチェの流れを汲む考え方は、つまり権力あるいは名声よりも内在的な社会的な対立を重視する考え方は、デュューイのヘーゲル的な考え方つまりすべての対立、抗争は有機的な社会的全体において和解することができるという考え方に對して、役に立つバランスを提供してくれれます。

ブルデュー哲学の相違点

今まで私は、ブルデューは分析的、そしてプラグマチックな哲学の中心的なプロジェクトをさらに進めていると述べてきました。ブルデューはそれを類体系的、経験的に豊かなかたちで社会なるものを構成する基本的な構造をより明確に説明することで推し進めているのですが、これはオースチン、ヴァイトゲンシュタイン、デュューイにとっては、言語、思考、そして行動を構成

的、政治的、経済的な力の不幸な産物である。こういった力によって芸術は社会の一般市民の生活から遊離されてしまっている。すなわち美術を愛好する人たちは差別化、区別化するために、博物館に収めているにすぎないのだと言っています。

こういったデュューイやブルデューの意見はきわめて親近性がありますが、これは非常に驚くべきことで、これはブルデューも最近言っている点です。私もブルデューの作業は、プラグマチズムの最近の動向の一部として位置づけるべきだと考えております。

分析哲学と同様に、彼もまたデュューイの意見を承認するために使うことができるだけでなく、デュューイの見方をさらに改善し高める、すなわち再生産と変革のメカニズム、そして社会の構成あるいは戦略の分析のためのコンセプトのより正確で、高度で、また経験的に立証されているシステムを提供することで改善できるのです。

これは私の著書である *L'art a l'essai* の「プラグマチック美学」の中でも述べておりますが、この一つの例を述べるだけでも十分だと思います。デュューイは、われわれの現実の概念は、大ざっぱに言うところ社会経済

するものでした。ということとは、哲学そのものはそれ自身を含めたすべてのディスクールを構成するような変化しつつある社会的な背景についてより突っ込んで考えなければいけないのでしょうか。そしてまた哲学者はブルデューのように社会学者にならなければいけないということの意味するのでしょうか。

一つの意見として、哲学というのはさまざまなレベルで、さまざまな異なる問題を扱っている。したがってこうした求心的な過激な結論を引き出す必要はないと言えるでしょう。しかしこうした問題は、哲学者の自己イメージを調整するかたちで出てくるということも可能なわけですから、ブルデューに対して哲学的な抵抗をすることにもなります。

ただはつきりとしているのは、社会なるものに基づいた哲学は、社会の研究をより真剣に行わなければならないということです。その理論と具体的、包括的、経験的な研究をブルデューは総合化しているわけですが、こういったブルデューのやり方は非常にすばらしく、われわれが見習うべき模範となります。

私も含めて、哲学者はこうした作業を行う研究、リソース、われわれの仕事の定義を正当化するようなもの

のも含めて、あればと思います。そういう意味において、皆さんがやっていらつしやるような哲学者と社会学者を両方交えるようなプロジェクトは非常に素晴らしいと思います。

私はブルデューに哲学的親近感をおぼえるのですが、そうは言っても、別にいくつかの問題について、私が異なる意見を持っても悪いというわけではありません。ここでちょっと異論を差し挟みたいと思います。

われわれの意見の対立は、私の著書「L'art à l'état de jeu」で「プラグマチック美学」で非常にはつきりと登場します。この本は、ブルデューの叢書「Le Sens Commun」によって出版してもらったのですが、ブルデューは、大衆文化を理解するための知的な努力のラディカルな高雅さだと私を非難しています。昔の議論を蒸し返したり、正直さを犠牲にして本当の違い、おそらくそれは生産的な違いだと思いますが、そういったものを無視するのではなく、私はブルデューとアングロ・アメリカ哲学の関係という私の中心課題に立ち戻り、ブルデューは、デューイよりもオースチン、ヴィトゲンシュタインのほうが好きなのではないかというかたちで、少し斜めの角度から、私とブルデューの違いについて

それを明確に見直してみようというつもりです。そしてまたそのためには哲学独自の専門用語、例えば「locutionary act」、「language game」といった言葉を作り出すこともできます。

哲学は物事を明確化する

しかし哲学は、カルナップその他の構成主義者のように、理論的なディスクールの基準に合致するような人為的、合理的に再構成されたものによる、われわれの通常のプラグマチックな概念に置き換える、あるいは変形させることを試みるべきではありません。そんなことをすると、話す、あるいは行為をするという効果的な共通の形態を失ってしまいます。話す、あるいは行為をするうえで、理論的な活動、通常の生活、プラグマチックに成功しようとするれば、人はもともと効果的な発話、あるいは行為の通常の形態に依存しなければできません。

ブルデューはこの普通なるものをよく理解しています。彼はオースチンがいうところの学者的なものの方への批判の中にも、また彼はプラグマチックな感覚を持つと呼びかけていますが、その中にもよく表れ

お話ししてみたいと思います。

デューイの非常に豊かな分析、習慣、歴史、社会、政治の分析を考えると、やはりデューイはビエール・ブルデューと非常に近いと思います。しかしまず最初にわれわれが明記しなければならないことは、ブルデューがオースチン、ヴィトゲンシュタインを選んでほかの分析哲学者を選ばなかった。これは単にオースチンやヴィトゲンシュタインといった人たちが、社会的あるいは社会的なるもの、プラグマチックであるもの、文学的なるもの、あるいは歴史的なるものを理解しているからというだけではなく、普通なるものを理解しているということにもなります。これは普通の言語に対して非常に注意深く、また献身的に注意をしているということにも表れています。

たしかに普通の言語は、それ自身の理論的な目的を追究するような哲学者が、プラグマチックな文脈を超えて乱用する、あるいは引っぱり出す場合に誤解を招くという可能性はありますが、ヴィトゲンシュタイン、オースチンはより論理的で合理的に再構成された言語によって置き換える必要があるとは考えていません。

哲学の仕事は、われわれの通常概念の分析史として、

ております。この感覚というのは、社会的に強化されたものの、教えられたものです。これは独自の論理を持ち、そして理論的な再構成によって適切に表出されることも、また置き換えられることもできないような独自の論理を持つているのです。

この普通なるものの認識は、一つの理論ではありませんが、これはブルデューにとっては少なくとも強力で、かつ高貴な民主的な衝動を表出しています。しかしながら、逆説的に普通なる言語を完全に尊重するということで、普通なる言語を形成する社会的な力の現状を維持することの一助にもなってしまう。それはこうしたものは民主的というにはほど遠いことがありうるからです。

ヴィトゲンシュタインの民主的な理想、それからオックスフォード、ケンブリッジ大学の非常にお高くとまった哲学者たちのいるところで彼の作業が生んだ保守的でエリート主義の学者主義との間の対比ゆえに、ヴィトゲンシュタインはきわめて強い不満を感じました。

そういう普通のことに対する敬意、尊敬のみならず、無私の客観性という伝統的な考え方に対するさらなる

コミットメントにより、哲学は物事を変えるというよりも、物事を正しく表す、あるいは明確化するという考え方、ここからオースチンあるいはヴァイトゲンシュタインのアプローチにおいては明確な静観主義、静寂主義が出てくるようです。

オースチンは、言語の誤用が原因となる過ちを示すことで、哲学的分析はちょうどわれわれが始めたところのセンスに戻してくれると言っています。そして普通の言語とは、最後の言葉ではない。そして普通の言語は原則的には改善ができる、また発話言語に取って代わるものもありうるということを認めながらも、普通の言語は最初の言葉であることをわれわれは覚えていて、終わりに、常に再生している複雑性をまず最初に適切に明確化して、そのあとで何か改善することがあればしていくべきだと言っています。

こうした順番づけの現実的な帰結として、結局、言語の修正という哲学の試みはいつもいつも後回しになってしまいます。これは言語的なもの、そして社会的なもの、相互的な絆を考えると、社会的な修正をも推進しうるものです。

また、ヴァイトゲンシュタインは『哲学探求』の中で、

あるいは世界の可能性を小さくしてしまうものであれば、改定し、取り替え、そして捨ててしまふべきであると言っています。

哲学的概念の修正

哲学者は詩人あるいは科学者と同様、概念の修正を提供できますが、それは、ディスクール複雑で、異議が挟まれ、変化しつつある場において試みることができるのです。哲学者は、詩人以上に、しかし科学者以下ではありませんが、事実によって制限されます。事実というのは、事実そのものがかなりのところわれわれの概念によって形成されますから、デューイにとつて概念の修正は、科学においても、哲学においてもそうですが、事実に基づくのみならず、知覚された必要性に基づくものでした。

デューイの必要感覚は、彼の事実に対する感覚をあまりに超えていました。経験といった芸術の修正的、グローバルな定義の方法によって、美学の分野の抑圧的、あるいは人を貧しくするような歪みを直さなければならぬという彼の試みは、私の著書でも言っておりますように、ドンキホーテ的であるとともに、不

「哲学はどうかたちであつても、言語の実際の使用に介入すること、干渉することはできない。哲学は最終的には言語の実際の使用を表現することができるだけだ。哲学はすべてをあるがままに放っておく」と非常に明確に言っております。

デューイは、オースチンやヴァイトゲンシュタインと同様に、普通の実践の哲学者です。そしてまた民主主義のさらなる擁護者でもあります。すなわちより強く普通の人々が必要とすることに敏感であり、また言語の社会的なものを構成するような階級関係に敏感でしたから、デューイは「普通の言葉とは単なる道具である。この道具によって、普通の人たちはディスクールの社会的な主人によって臣下にさせられる、あるいは抑圧される。このディスクールの社会的な主人たちもまたたゆまざる社会的変化の中で、言語的なモードが遅れてしまうことによって、自分たち自らも異にかけられてしまい、疎外されてしまう」と言っています。

したがってデューイは実践のフェティシストではなく、通常のプラグマチックな社会改良論者、世界改善論者でした。彼の主張は普通概念は、こういった普通の概念の体系的な疑問を疎外する、自由を制限する、

要なものです。しかしそれにもかかわらず、デューイは正しく思えます。すなわち、哲学は役に立つ修正的な役割を果たすことができ、哲学者は決して通常の使用、あるいは通常の使用が表現する実証的な事実を受け入れることのみでなくとも良いのです。もちろん理論的な分野、考え方は、物質的な状況の改革に取って代わることはできませんが、そういう物質的な状況の改革のために、デューイは疲れを知らずに仕事をしたのです。

しかし言語あるいは実践の相互主義的な構成を通して、新しい話のしかたは、姿勢あるいは行為に影響を与えます。したがってより実体的な、あるいはより実際的な改革をもたらす一助となりえるのです。理論的な介入がそうした改革をまったく推進できないとか、あるいは指導できないと考えることは、プラグマチズムから見れば、理論と実践の間の考えられない非常に有害な二分法を受け入れてしまうことに等しいということになります。

ブルデューはデューイの民主主義的な運動、あるいは普通の人たちの問題に対するプロジェクト的な関心について、同じように重要であると考えています。し

かしブルデューの理論の政治的側面は、オースチンや
ヴァイトゲンシュタインのそれにより近いように思いま
す。

事実、ブルデューは明確に文化的ディスコースの普
通の言語におけるある混乱した抑圧的なカテゴリーに
対するデュイーの反論を、「いつわりのマジック」であ
ると反駁しています。そして変化が必要なのはわれわ
れのカテゴリーではなく、その他の苦しみを生み出す
物質的、制度的な状況であるとしています。

しかしどうしてブルデューはこの両方において同時
に作業するというプラグマチックな戦略を認識できな
いのでしょうか。つまり言説的な、より物質的、制度
的な変革の両方を求めるような戦略をどうして認識で
きないのでしょうか。

修正主義的理論

ここはこうした問題について議論する場ではありま
せん。ただ、本日はとりあえずブルデューの立場を想
定し、彼がプラグマチズムの理論的な積極主義を拒否
する理由はこういったものではないかということをも提
起してみたいと思います。すなわち私のようなアメリ

カのプラグマチストにもわかるような理由、そしてブ
ルデューの思考のプラグマチックな側面に焦点があた
るような理由を考えてみたいと思います。こうした理
由が根本的な客観主義、あるいはナイーブな実証主義
にあるはずがない。なぜなら言語や科学を形成する当
事者としての社会的な勢力をブルデューほどよく知っ
ている人はいないからです。

この理論的修正主義に反対する一つのプラグマチッ
ク議論としては、例えば言語を変えることは混乱を招
きかねません。混乱が起こると、われわれの現実に対
する確固たる感覚が脅かされてしまいます。また実体的な、物質的な変革が、データ、方向、その手段に依
存するような事実に対するわれわれの確固たる感覚も
脅かされてしまうのです。

理論をいじくり回すということで、真なる物質的な
変革はできなくなってしまう。さらに社会的に力
の無い人たちは一般的により脆弱であり、変革に対応
するような力を持ち合わせていません。したがって抑
圧的なカテゴリーに挑戦することから生まれる不透明
感、混乱がより抑圧的になってしまいう一方、より対
応ができる者、あるいは根っからのエリートは単に自

らの非目的な目的のために、その概念の変革を行う
ことができてしまいます。

こういう議論、これはブルデューがラディカルに非
難すること、こういう考え方を打ち出しているよう
に思えますが、こういう議論は否定したい力を持っ
ています。こういった議論がT・S・エリオットのよ
うなプラグマチックな保守主義者によって効果的に使
われているとはいっても、ブルデューのより先進的な
社会的な目標のために使うということが悪いわけでは
ありません。

しかしこうした力はどうも限られているようです。
きわめて過激でグローバルな変化は、社会的あるいは
認知の安定性を危険なカタチで覆ってしまう可能性が
あります。しかし穏便で、場所特異性を持つような、
その場所自体の概念的な修正であれば、こういったこ
とが起こらなくてもすむでしょう。特に習慣的、社会
的にわれわれ自身にすでに組み込まれてしまっている
保守主義の程度を考えると、そういったことが言えま
す。

変化の実験は、前進というプラグマチックな考え方
に不可欠ですが、こうした実験の危険性を慎重に評価

し、最小限にしておく必要があります。それによって
変化が安定性とバランスが取れるようにするのです。

単に実験のみがそれをどのようにやればいいかをわれ
われに教えてくれます。

ブルデューが修正主義的な理論を拒否するもう一つ
の理由があるでしょう。理論家として、それがどんな
に醜く、痛いものであっても、事実を変化させること
なく、事実を明らかにすることが目的であると主張す
るもう一つの理由です。

こういう立場、伝統的な科学的客観主義によって、
ブルデューは自然科学の伝統の象徴的な力をすべて使
うことができます。この伝統は知的世界においては、
哲学に対しても依然としてもっとも強い力を発揮して
います。そしてまたこれが知的世界のほかのどの分野
にも増して、政治に対してもっとも大きな影響を与え
ているように思います。

この象徴的な力に同化することによって、そしてま
たそれによって自らの象徴的な力を高めることによって、
ブルデューは自らの意見を政治的な分野において、
より権威のあるものにするのができ、社会政治的改
革の代理人として、自らの力を改善することができ

のです。

しかし逆に、彼の専門家としての地位は社会科学に属しますから、社会科学の客観性について疑念があるというのが主な理由ですが、それによって自然科学の象徴的な力を持つていないがために、結局、修正主義的な理論をもてあそぶことは致命的になりかねません。限られたかたちであっても、修正主義的な理論を使うことは、ブルデューの仕事の客観性、そして彼のすべての努力を結集して処理した経験的な研究の確かさ、あるいは彼の意見の絶対的な信用性をなくしてしまうというリスクがあります。

それに対して、哲学者はわれわれの知的な伝統、それから文化という分野において別の場所を占めています。哲学者は少し異なる源から、その象徴的な力を得て、客観主義、そして厳格な科学のイデオロギーに対してコミットメントを持つという教育制度を通してのみ、哲学者の学術的なタイトルを得ることができるとは、哲学者という名前の持つ象徴的な力は、近代科学よりも昔からある、あるいはまた幅広い伝統に根ざすものです。

哲学者の伝説的な、社会的な役割は、修正をするよ

う。

ブルデューの、社会的なるものの生産的な分析によって、哲学者の修正に向けての、おそらくはドンキホーテ的な、また危険な試みがさらに豊かになり、指導されるようになるというメリットはありますが、こういった試みはブルデューにとっても役に立つものであると思われまゝ。少なくとも、彼自身の理論化のコントラストがさらに堅固になり、科学的なものになるでしょう。

私の著書である『プラグマチック美学』において、修正主義的な試みをしています。私は特に美術、それからポップカルチャーの分野でこの問題に取り組んだのですが、ここはかなりブルデューの議論との違いはつきりするところです。

例えば私はこういうふうに修正主義を試みている。彼はそれに対して反対するという一つの例ですが、二人で実際にその議論をしたこともあります。ここがやはり彼の意見、プラグマチズムの違いが非常に明確なところではないかと思えます。

うな予言者、ユートピア的な神話を作るような人たち、それから超越的な賢人と同じようなものです。しかしこういった人たちがいる程度単純な生活を主張していても、普通の事実あるいは習慣に反抗する人たちです。われわれの社会的な無意識におけるこの伝統はきわめて強いものです。そうでなければ、社会がこれだけ人を煙に巻くような哲学のナンセンスに耐え、そしてこれを賞賛することができでしょうか。この伝統が修正主義者としての哲学者に象徴的な力を与え、この力を社会学者が持つことはできません。

事実、最近経験主義的な科学について、なかなか話すことができないということを考えると、修正主義的理論というのは、哲学者がもつとも効果的な、象徴的な力を発揮できる場所かもしれません。そしてまた哲学者はこの象徴主義的な力を、その経験的な成果に對してまったく何の敬意も抱かないような極端な修正主義に走らなくても発揮することができるのです。

修正主義的理論はやつてみる価値があると思いますし、また私のいくつかの作業の中でもやつておりますが、そうであるとすれば、哲学者というのはおそらくはブルデューのプロジェクトの限界を超えて、あるい

季刊 **iichiko**

特集・世界思考の文化学Ⅲ
唐紙・プラグマチズム・場所

R.シュスターマン
野崎守英

J.W.バーナウアー
中川雄一

内田隆三
山本哲士

SUMMER
1997
NO.44

